

博 士 学 位 論 文

—論文要旨および審査結果の要旨—

第 7 号

武蔵野音楽大学

— は し が き —

本編は学位規則(平成25年文部科学省令第5号)第8条による公表を目的として、平成25年度本学において博士(音楽)および博士(音楽学)の学位を授与した者の論文の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

目 次

学位記番号	学位の種類	氏 名	論文題目	頁
博甲第 13 号	博士 (音楽学)	星野 和幸	盲僧による琵琶付法要の構成と音楽	1
博甲第 14 号	博士 (音楽)	佐藤 恩実	日本におけるオルフ・アプローチの 適用と展開に関する研究 ーバイ・ミュージカルティを培う オルフ・シュールヴェルクの 2 つの 系統の提案に向けてー	4

氏名	さとう めぐみ 佐藤 恩実
学位の種類	博士(音楽)
学位記番号	博甲第14号
学位授与日	平成26年5月24日
学位授与の条件	学位規程第4条の1
学位論文題目	日本におけるオルフ・アプローチの適用と展開に関する研究 —バイ・ミュージカルティナーを培うオルフ・シュールヴェルクの 2つの系統の提案に向けて—
論文審査委員	主査 教授 丸山 忠璋 副査 准教授 森田 恭子 副査 講師 清野 美紗緒 副査 講師 宮崎 幸次 副査 山本 文茂 (東京芸術大学名誉教授)

論 文 要 旨

オルフ・アプローチは、ドイツの作曲家カール・オルフ Carl Orff(1895-1982) によって創始された音楽教育の理念と方法であり、世界各地に普及し、実践されている。今日、わが国においても、オルフ・アプローチの特徴とする概念や方法論が音楽科授業に浸透し、教師は実践的に授業に取り入れていく必要性に迫られている。

しかしながら一方で、1990年代以降、「オルフ・アプローチの衰退」の文字が多くの文献に見られるようになり、次世代への普及が停滞しているという見方もできる。

筆者は日本においてオルフ・アプローチの適用と展開をさらに発展させるために、以下の3つの疑問点を解決することが急務であると考えた。

①先行研究では、オルフの教育理念は「曖昧」であるとか「わかりにくい」と言われてきたが、オルフの教育理念の理解を促進するような思想は存在しないのだろうか。

②日本におけるオルフ研究者・実践者はどのようにオルフの理念を理解し、実践しているのだろうか。文献上には示されない、日本の研究者・実践者特有のオルフ観や思考に基づく指導実践の功績や問題点が存在しているのではないだろうか。

③我々日本人のオルフ実践者は、「その国の言語や伝統音楽文化から音楽教育を出発する」という C. オルフの教育理念に基づく「日本適用型」のシュールヴェルクの系統と、オリジナルのシュールヴェルクの系統をどのように選択して実践を展開すればよいのだろうか。

以上の問題意識に基づき、序章では、研究の動機について述べ、先行研究を検討した上で、

研究の目的および方法と内容を示した。第1部では、文献研究を通して、研究の前提となるオルフ・アプローチの理論的枠組みと日本における受容史について概観した。第2部では、それを踏まえて、文献に明文化されていない実践者や研究者の思想や思考から、問題点の要因を読み取る必要があると考え、オルフ研究者・実践者を対象に、日本のオルフ・アプローチ適用の実態調査・分析と考察を行った。第3部では、日本におけるオルフ・アプローチ受容の問題点を浮き彫りにし、その解決に向けての方策を示した。

以上の研究から得られた結論を踏まえて、本博士論文は、以下の点については、日本におけるオルフ・アプローチの適用と展開に関して貢献することができたと言えるだろう。

①先行研究では、オルフの教育理念は「曖昧」であるとか「わかりにくい」と言われてきたが、ゲーテの思想に基づいて見れば、明確で誤解の余地を挟まない音楽教育理念であることが明らかになった。

オルフの音楽教育にはゲーテの自然観・教育観の大きな影響が見られた。ゲーテの思想に基づけば、オルフ・シュールヴェルクにおいて従来個別に捉えられていた、「創造性の伸長」、「自発性」、「自然素材の使用」、「過去への回帰」、「子どもに内在する音楽の発展」というキーワードが関連づけられ、根拠をもって理解できる。

②文献上には示されない、日本人オルフ研究者・実践者のオルフ観や思考をM-G-T-Aの手法によって詳細に分析し、明解に整理することができた。

予備調査の結果では、オルフ・アプローチへの実感と音楽的な思考の関連が見られた。

本調査の結果を総合的に分析したところ、対象者らは「音楽系」、「教育系」、「心理系」のオルフ研究者・実践者グループに大別することができ、それぞれの特徴的な思考が見られた。オルフ研究所への留学経験をもつ対象者らには、留学時期が1980年代以前か以降かによって、シュールヴェルクに対する考え方に大きな違いがあった。さらに、ユングマイヤー博士へのインタビューから、ドイツにおける1968年以降の社会運動や新しい芸術運動が、オルフ研究所の活動に大きく影響していたことが明らかになった。

③日本におけるオルフ実践の最大の問題点であった「適用型のシュールヴェルク」の系統を、オリジナルのシュールヴェルクの芸術性と日本伝統音楽の研究動向とを踏まえて再考し、新たな構想を示唆することができた。

インタビュー調査によって浮き彫りにされた日本におけるシュールヴェルク実践上の問題点は、ゲーテの思想を踏まえて再考することにより解決可能であることが明らかになったが、「適用型」のシュールヴェルクの系統に関しては、再検討が必要であった。

本博士論文は、新しいシュールヴェルク実践においては、ドイツ語から出発するオリジナルの系統と、日本語から出発して、日本伝統音楽の様式を踏まえた適用型の系統を2系統つくり、それらを並行して実践するのが望ましいという結論に至った。

本博士論文は、「オルフの理念は曖昧である。シュールヴェルクは誰もが参加できる易しい音楽である。」という先行研究の見解を覆し、「オルフの理念は明解である。シュールヴェルクは確かなテクニックに支えられるべき芸術性の高い音楽である。」という見解に至った点にプライオリティーがあるといえる。

論文審査結果の要旨

当論文は、日本におけるオルフ・アプローチの適用に関して、以下の3つの疑問点を明らかにするために研究を行っている。すなわち、①オルフの教育理念をより深く理解させるような思想の存在、②日本のオルフ研究者・実践者のあいだに見られる特有のオルフ教育観や思考に基づく指導実践の功績やその特徴、③今後の日本のオルフ教育実践の方向性に関する考察、の3点である。

以上の3点に関して、本論文では、一つに、先行研究の見直しと日本におけるオルフ受容の問題点の掘り起こしを行い、二つに、日本におけるオルフ・アプローチの実践に関して、研究者・実践者らへのインタビューの結果をM-GTA(Modified Grounded Theory Approach)の手法により整理したものを独自の視点において解釈と考察を行い、三つに、オルフ・シュールヴェルク適用の問題点とその解決の方向性について、様々な事項に関する知見に対して検討を行っている。

当論文は、問題設定とそれに対する一貫した研究・考察を展開している点で優れたものである。すなわち、①に関して、ゲーテの自然観・教育観の視点からシュールヴェルクを眺めることで、従来個別に理解されてきた「創造性の伸長」「自発性」「自然素材の使用」「過去への回帰」「子どもに内在する音楽の発展」といったキーワードが関連付けられ、根拠をもって理解することができるとし、「畏敬」という概念によって、シュールヴェルクにおける芸術性の保持が不可欠であると指摘した点(第1章)。②に関して、調査対象者の考え方の傾向を、「音楽的背景」「オルフ研究」「オルフ観」「指導実践」「後進へのアドヴァイス」の5つに分けて整理し、それぞれに対する考察を加えている点(第3章、第4章)。③に関して、日本におけるオルフ・アプローチの今後の展開に関して、オリジナルのシュールヴェルク学習による芸術性の獲得と、日本語および日本の伝統音楽の様式を踏まえた適用型シュールヴェルクの学習による創造性の育成という、二つの系統を並行して学ぶ“バイミュージカルティ”による実践のあり方を、方向性として望ましいと結論付けている点(第5章、第6章)などが評価された。

今後の日本における展開の方向性については、研究者において未だ試論の段階にあるものの、本論文は全体に綿密な先行研究とその援用、並びに的確なデータ収集とその分析により、日本のオルフ・アプローチの課題把握と今後のあり方に適切な指摘を行っている点に独創性が見られ、博士(音楽)の学位論文として水準に達していると審査委員会は判断した。

博士学位論文 論文要旨および審査結果の要旨 (第7号)

平成26年8月5日発行

発行 武蔵野音楽大学大学院
編集 武蔵野音楽大学学務部
〒176-8521 東京都練馬区羽沢 1-13-1
電話 03-3992-1128
